

令和7年度第1回岐阜県総合教育会議 議事録

1 開催日時及び場所

令和7年9月12日（金） 11時00分 ～ 12時00分

岐阜県庁舎 6階 特別会議室

2 出席者

知事 江崎 禎 英

教育長 堀 貴 雄

委員 村 上 啓 雄

委員 打 江 記 代

委員 吉 田 香央里

3 オブザーバー

総合企画部長 市 橋 貴 仁

副教育長 松 本 順 志

未来創成局長 兼 松 伸 和

4 陪席

義務教育総括監 青 木 孝 憲

教育次長 中 川 敬 三

総合政策課長 渡 部 達 弥

教育総務課長 野 中 正 史

未来創成課長 池 本 哲 哉

5 議事録

別紙のとおり

議 事 録

発 言 者	発 言 内 容
総合企画 部 長	それでは、ただ今より総合教育会議を開催する。 本日の会議では、教育に関する政策について、知事より約 20 分間のご説明をいただいた後、今後の本県の教育の方向性について、委員の皆様よりご意見を賜りたいと考えている。 なお、本日はマスコミの皆様に公開しているほか、市町村教育委員会の皆様がオンラインにて視聴されているため、あらかじめご承知おきいただきたい。 また、皆様のお手元にあるタブレット端末については、事務局にて進行に応じて画面を切り替えるため、各自での操作は不要である。ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。 それでは、早速ではあるが、知事よりご説明をお願いする。
教育に関する政策について	
知 事	本日はご多忙の中、お集まりいただき、感謝申し上げます。私にとって、今回が初めての総合教育会議である。 先ほど控室でも少しお話ししたが、教育とは国の根幹をなすものである。私自身、経済産業省時代に「未来の教室」という、この国における新しい教育の形を考えるプロジェクトとして、GIGA スクール構想を担当していた。その後、内閣府において文部科学省の改革担当審議官として、未来の教育の在り方を検討する業務にも従事した。これらの経験を

踏まえ、現在、この国が抱えている課題、そして教育の方向性について、提案も含めてお話しさせていただく。

まず、私が県政を担う上で掲げた「10の政策目標」の中には、教育に関する項目をちりばめている。豊かな感性を育み多様な子どもと一緒に学ぶ教育を実現したい。

具体的には、岐阜県ならではの自然環境を活用した教育プログラムの充実を実現させる。特に、土や動物に触れる機会を増やすことは、経済産業省生物化学産業課長として医療分野に携わっていた経験上、子どもたちの免疫力を高める上で非常に有効であると考えている。

また、異学年学級を推進し、人間関係を円滑にするソーシャルスキルの向上を図る環境整備を進めたいと考えている。

さらに、県外の他地域との交流において、林間学校を推進することで、「ふるさとを学び、発信する教育」の充実を図ることも重要である。これは防災教育にも関連するため、最後にお話しさせていただく。

加えて、学校教育における地域住民の関わりを増やすことで、学校教育の食の安全と質の向上を図っていきたい。

そして、フリースクールとの連携を進め、インクルーシブ教育を推進する。こうしたことを政策目標として掲げている。

こうした議論が必要である理由は、少子高齢化により子どもの数が減少しているにもかかわらず、約35万人の子どもたちが学校に通えていないという現実がある。この問題にどう対応すべきかが問われているが、数字の大きさばかりが議論されがちである。しかし、実際には徐々に増えたのではなく、突然急増したのである。その要因のひとつは新型コロナウイルスである。この点から、子どもたちに何が起きているのかということを見れば

実は答えが見えてくる。

国においても議論されたが、コロナによって学校でのコミュニケーションが大きく制限された結果、ソーシャルスキルトレーニングに制約を受けることになった。ソーシャルスキルトレーニングとは、友人や兄弟との衝突を通じて、物事の是非や他者の気持ちを察する力を養う重要な機会であり、これは集団教育の根幹をなすものである。

最近は一子が多いため、そうした子どもたちにとって、他者との関わりを通じたトレーニングを経験しないまま、突然、「学校へ行け」と言われても、難しい状況である。なぜかという、現代の子どもたちはおかしくなっているのではなく、むしろ真面目になっている。真面目であるがゆえに、親の期待に応えなければならないという強いプレッシャーを感じている。つまり、親の評価を非常に気にしている。

私の同級生が校長を務めていたことがあり、その縁で一度講演に行ったことがある。講演後、「最近の子どもたちは怒ってはいけなから大変だ。褒めて育てるのも難しい」と話したところ、「いや、今の子どもたちは褒めてもいいけない」と返された。理由を尋ねると、「褒められると、いじめの対象になるからだ」という。

これは大人の社会にも通じる現象である。面と向かって褒められると、周囲から妬まれ、いじめの対象になることがある。つまり、現代の子どもたちは、親や周囲の期待に応えようと努力するが、頑張りすぎるといじめの対象となってしまうのである。そのため、狭いレンジ(集団の枠)に入っていないと安心して学校に通えない。

現代のいじめは、かつてのようにガキ大将が弱い子をいじめる構図ではなく、いつ自分がいじめる側になるか、いじめられる側になるか分からないという不安の中で苦しんでいる。

こうした状況の中でコロナが発生し、2年、3年と学校での活動が制限される期間が続

いた。そして、いきなり「さあ、学校へ行きなさい」と言われても、子どもたちは不安で仕方がない。その結果として、学校に行けない子どもが増えているのが、残念ながら現在の実情である。

これは一つの説に過ぎないが、中学校の先生との議論の中でも、同様の見解が共有された。私自身も4年間県内を周り、多くの不登校の子どもたちと話をしてきたが、確信を持って言えるのは、不登校になる子どもは皆、真面目な子であるということだ。真面目であるがゆえに、学校に行けなくなってしまうのである。

では、どうすればよいのか。その答えを模索してきた。今日の一つの大きなテーマは「新しい学びを創るべきではないか」ということである。

この国の教育は、明治以来、教育の形が変わっていない。学校で先生が黒板に向かって教え、生徒はそれをノートに取り、復習し、学ぶというスタイルが続いている。このスタイルは、先進国の中では日本や韓国に残っているが、これは悪いものではなかった。人口が増加していた時代において、読み書きそろばんを効率的に教えるには非常に良かったと言われている。しかし、多様な子どもたちが決められた教室、学年の中で一律の目標の下で一律の内容を一律のペースで一斉に受け身で学ぶというこのスタイルは、「同じ学年の子どもには同じ能力が備わっている」という前提がある。ある程度まではこの方法でよいが、そこから先の学びには適さない。

では、どうするのか。まさに「未来の教室」でやっていたことは、子どもたちが自ら考え、個人で目標を選択し、多様な内容を個々のペースで、個別に、時に協働して、能動的に学ぶ。実はこれは、文部科学省が示す学習指導要領に書かれている内容である。こうしなければいけないにもかかわらず、教育スタイルが昔のままであることに、大きな矛盾があるのではないか。

そのような中で、資料5ページに示されているように、先生が教えるのではなく、生徒同

士が教え合い、学び合う中で、先生の役割も変えていったら良いのではないか。「ティーチャー(Teacher)」ではなく、これから先生は「コーチャー(Coacher)」へ変わると。つまり、学ぶことをサポートするという形に変えられないか。これは、まさに「未来の教室」の中で出してきた一つの結論である。

実際に岐阜県内には、こうした取組を行っている学校が存在する。私も視察したが、異学年集団による学び合いを実践していた。これは何かというと、具体的には、学級編成を変える。1年生から3年生までを1クラス、4年生から6年生までを1クラスとする学級編成である。これにより、例えば3年生で目立たなかったり、成績が振るわなかったりしても、同じクラスの中に1・2年生がいて、リーダーになれる。これを学校で2回経験しようと。3年生でリーダーだった子が、4年生になると再び最年少となり、5年生や6年生のお兄さんやお姉さんが、自分にしてくれたことを、今度は自分が下級生にしてあげるという経験をしようではないかという取組である。

その効果については、まさに今述べたように、上級生が下級生に教えることで、自らの優しさや存在価値に気付くようになっていっている。そして、どんな人にもそれぞれに価値があることに気付き、認め合うようになる。

以前、私が授業参観に訪れた際に驚いたことがある。3年生の子が1年生の子に算数を教える中で、「先生、子どもって無限の可能性があるんですね」と言っていたのである。

当たり前と思うことで、自分自身の可能性を消してしまっていたと。いろんな無限の可能性に気づく。自分が3年生でようやくわかったことも、1年生の子が理解してくれることで教える喜びを感じられる。

7ページの写真は、ドッジボールをやっているもの。1年生と3年生と一緒にドッジボールをやれば、3年生が一番強いと決まっているわけであるが、何が起こるかということ、自分たちでルールを変えるのである。3年生が1年生を狙ってはいけない、1年生は2回

ボールに当たっても大丈夫というルール。みんなが楽しく遊べるように児童が自分たちで考えるのである。

この国が数十年間苦しんできた大きな「いじめ」の問題に対して、この学校では、違いを認められた結果、初めていじめが減ったそうである。いじめは、同じような人を競争させればさせるほど陰湿になると言われているが、人は明らかに自分より弱い存在に対しては優しくなる。これは本来の社会の姿であるにもかかわらず、分ける方向に進めてしまったのではないか。これも一つの仮説ではある。

異学年教育を導入した際、最も抵抗を示したのは先生であった。従来の指導方法とは大きく異なるため、「そんなことはできない」との声が多かったようだ。この学校でもある先生が「やってみましょう」ということで始めた結果、子どもたちが明らかに変わり、それを見た他の先生もやってみようかということになった。

この国の教育は、効率性を追求した結果、「遊び」と「学び」を分離してしまった。つまり、「遊び」は放課後や休み時間に走り回るなどの楽しい活動、「学び」は教室で静かに座って苦しむものになった。本来は「遊び」の中にこそ学びがあるはずであるのに、「遊び」と「学び」を分けることになり、苦役のような教育にしてしまったのではないか。

この学校では、子どもたちが面白いと思うことをやる中で学びをしたいということで最初は算数から始めたが、「社会や国語もこの方法で学びたい」との声が子どもたちから上がり、変わっていったと。その結果、先生の「遊び」に対する概念も変わった。

私が授業参観に行って驚いたことは、人権について考えるという授業を視察した際、子どもたちはグループごとにわいわいと議論をしていた。絵を描いたりしているところもあれば、折り紙をしているところもあった。校長先生から「この中にまだ日本語を話すことができない子が2人いますが、わかりますか？」と聞かれたのだが、中国とフィリピンから来た2人は、周囲の子どもたちの中に溶け込んでやっていた。これを、エピソードで終わらせる

のではなく、新しい教育の形として小中学校で導入できないかと考えている。

では、今どれくらいやっているのかというと、やってないわけではない。現在、多くの小学校では、掃除や給食、朝の会などの日常生活に異学年を取り入れている。また、特別活動や学校行事でも異学年を取れ入れている。

これから重要なのは、教科の中に取り入れていけないかと。算数、理科、社会、国語などで学び合う。成績の良い子どもが足を引っ張られるのではないかという議論がよくあるが、算数は大体平均で 30 点上がるそう。真ん中ぐらいの子はものすごく伸びるそうで、上の子は人に教えることで学びの定着度が高いと聞いている。先生が大変ではないかと聞いたところ、先生は大変ではないそうである。先生は教えるプロだから先生に聞いて分からないと自分が本当に理解できていないと思うため、子どもはまず友達に質問し、いよいよとなってから先生に尋ねる。ある学校では、同じ教室内で異なる教科を同時並行で学ぶことも行われているが、それでも先生の出番はそれほど多くないと聞いている。

最終的には、日常生活のすべてに異学年を取り入れて、そもそもの学校の編成を変えてしまう。世界ではもうこれをやっている。様々な課題を踏まえながら、進めていきたい。特に異学年教育の推進により、ソーシャルスキルトレーニングの向上、長年にわたって課題であったいじめの問題の解決、そして学校を子どもたちにとって行きたい場所にする。

更には、逆転授業を可能にする。我々の頃は、学校で習ったことを家で復習して翌日に小テストで確認するというスタイルが基本だったが、逆転というのは家で予習をしてきて、学校で復習をする。つまり学校で分からないところを聞くというスタイルになる。

私も GIGA スクール構想の担当をしていたが、GIGA スクール構想とは、紙の教科書がデジタルになっていると考えている人が結構多いが、家で予習し、学校で復習するためのもの。4月に教科書をもらうと好きな科目はその日のうち読んでしまうこともあると思うが、

自分の興味があることはどんどん進めていくことができるのである。

「未来の教室」において、6つの小学校で1回実験を行った時の話になる。今、算数の授業時間は小学校1年生では136時間、小学校2～6年生では175時間と定められており、合格点80点を目標として授業を進めるのだが、タブレットを使って自分のペースで学ぶことができると、早い子は48時間、遅い子でも84時間で終わる。

教育のスタイルを変えるというのがもともとGIGAスクール構想の目的であるが、タブレットを導入することで、こういう逆転授業ができる。

先生の作業時間についてもストップウォッチで測り調査をしたところ、1週間の作業で最も多いのは小テストを作る時間だった。自分のクラスに合わせて問題を選んで印刷して配布して、回収して採点してグラフ化するという作業に10時間費やしていることが分かった。6クラスあったので、6人の先生がそれぞれ10時間使っていたということ。タブレットを活用することでテストの難易度を選択でき、採点をして集計をするまで、数秒で終わる。また、グラフ化が可能であるので、先生のバイアス、すなわちいつも成績が良い子が良くなかった時には調子が悪かったのかなという思い込みも、グラフ化により実態が明らかになってくる。さらにすごいのは、子どもが問題を開いてから何秒で回答したかまで確認できる。

それでは、今後の取組方針の提案であるが、算数、理科、社会、国語、英語のうち1以上の教科を対象に、3以上の学年による学び合いを年10回以上取り入れることを支援してはどうかと。すぐに効果が出るかは分からないので、事業期間は3年間とする。小中学校を対象とし、市町村教育委員会から手を挙げていただく。

支援内容としてはまだイメージであるが、やはり新しい体制になるので、人手が一番欲しいということで人件費を見てはどうかと。そしてやはり先進校を視察したいということであったので、旅費や報償費、諸経費なども支援してはどうかと。その代わり、条件としては

効果測定などをさせていただく。つまり、この事業は新しい時代の教育に取り組むことを支援してはどうかということである。

では、最後にもう一つ。今、子どもたちの数が減っているという議論がある中で、提案する事業である。政策オリンピックの第2弾で実施した「ふたつのふるさと(海・山の防災交流)事業」である。何かというと、県外の児童・生徒に岐阜県に来てもらい、自然体験を通してお互いに交流することで、自分の住んでいる地域の自然や歴史や文化を発信する、ないしは、学んでくること。

ここにポイントがあるが、岐阜は木の国、山の国であり、海の近くの子たちとの交流をすすめていきたい。南海トラフ地震が起きてから、避難先を考えるのは難しい。私が商工労働部長だった際、東日本大震災が起きた。福島を含めて数百人の方が岐阜に来たが、ほとんどの方が飛騨高山を選び、美濃地方にほとんど来なかった。理由を尋ねたところ、飛騨高山は知っているからということだった。美濃地方に来た方は、親戚がいるからと言っていた。だから、人は知らない土地には行けないということ。

それならば、子どもたちに「第2のふるさと」を持ってもらい、地震が起きてから、さあ、どこに行くかと考えるのではなく、あの時、自然の中でみんなと楽しく遊んだところに行けば良いという選択肢を持ってもらう。そして、防災交流も併せて行う。平時においては、「第2のふるさと」を持つことで海なし県の岐阜の方にとっては、海を楽しむことができる。少子化が進む中で、子どもたちに2倍ふるさとを楽しんでもらうことによって、交流も増やせないかと。

事業としては、岐阜の小中学生と愛知県や三重県などの小中学生が定期的な交流をすること。お互いの地域の素晴らしさを発信し、有事の際には避難できる関係を築くこと。すでに支援対象団体を募集しており、手を挙げた池田町では、三重県と交流を始めている。まず大事なことは楽しみながら交流をしていくということ。

	財政的な支援はそれほど大きくないが、1団体当たり 200 万円で、10/10 の補助をしている。なお、事前準備として、例えばこの地域にどれくらい空き家があるのか、また、どこの方が協力してくれるのかという準備を行う予算も用意している。 早く取り掛からなければ意味がないため、まずは政策オリンピックの第2弾で実施したが、本格的には、三重県、愛知県、場合によっては浜松市などとも進めていこうと考えている。未来も考えて教育に防災を絡めていってはどうかということを考えているところである。
総合企画 部長	ただいま知事より説明を行った内容、また本日の教育が抱える課題、そして岐阜県が今後目指すべき教育のあり方について、委員の皆様から忌憚のないご意見をいただきたい。
意見交換	
村上委員	一つ一つのご発言に深いアイデアが込められており、非常に期待が持てる内容である。 さて、いくつかご質問をさせていただきたい。 第一に、私は医師であり、特に感染症を専門としている。これまで新型コロナウイルス対策にも従事してきた立場から、知事が用いられた「免疫力」について、どういう意味合いで付け加えられたのか説明いただければと思う。
知事	私は国に戻った後、生物化学産業課長として勤務し、再生医療をはじめ、がんや感染症などの分野に携わってきた。今回の場合は、むしろアトピー性皮膚炎など皮膚関係、そしてきれいすぎることによって増えている免疫暴走における「免疫力」に言及している。医療の世界でも、子どもの頃から動物の糞尿に触れること、土に触れることによって特に皮膚関係は耐性ができると言われている。 単なるエピソードだが、私は合併前の美山町の山奥の出身であり、現在は花粉症が深

	刻な問題となっているが、私も姉も花粉症を発症していない。午前中には花粉が煙のように舞い、車のボンネットに文字が書けるほどであるにもかかわらず、である。 一方で、妹は花粉症を発症している。姉と妹の違いを考えたとき、私と姉の幼少期にはヤギを飼っていたという環境の違いぐらいしかない。もちろん、生物学的に言うといろんな耐性があるので一般的ではない。 問題は田舎で暮らすかどうかではなく、生活環境が清潔すぎることにあると考える。特に化学物質に対する反応が圧倒的に増えている。こうした背景からも、自然に戻していくことで免疫力をつけることが重要であると考えている。
村上委員	私は感染症対策を専門とする医師であり、動物や土壌との接触にはリスクが伴うと認識している。そのため、「免疫力」という言葉が、そうしたリスクを考慮した取組であれば良いと感じた次第である。例えば、適切にワクチン接種をすることなども含めた形で施策を展開いただきたい。 もう少し伺いたいですが、ソーシャルスキルの向上は極めて重要である。私自身、コロナ対策に携わる中で痛感してきた。知事が冒頭で示されたように、不登校の増加は大きな課題である。承知されていると思うが、座学は医学の世界でも良くないことから、岐阜大学では20年前からテュートリアル教育というコーチング教育を実践してきた。これには長所も短所もある。そこで、この異学年学級が取組が、具体的にどのように不登校の抑制につながるとお考えなのか、お聞かせいただきたい。
知事	まさに重要なご指摘である。 私が授業参観で学校を訪問した中で間違いなく言われることは、子どもたちが学校に行くのが楽しみで仕方がないということである。 ただ家じゃない場所に行けるからよいのではなくて、子どもたちの方が学校に行きたい

	と思わなければ、やはりこれは答えになっていないと思っている。特に、子どもたちは異学年学級での学び合いが楽しみで仕方がない。子どもたちは先生に「他の授業も学び合いにして」と言っており、その姿を見て他の先生たちも変わってきた。すでに、答えは子どもが出している。それがまさにこの異学年の一つの答えだったかなと思っている。
村上委員	中学校でも一斉に導入するわけにいかないと思うので、まずは低学年から段階的に進めていくことが望ましい。 また、テュートリアル教育において重要なことは、ワークショップばかりを行うのではなく、座学で解説を行うことも必要だと思うので、全部のカリキュラムを包括的に組み替える作業が必要なのかなと思っている。異学年教育についても、このように包括的に考えていただくとよい思った次第である。 それと、学校給食の説明における安全性とはどういう意味合いなのかについて教えていただきたい。
知 事	食育という言葉は、食の教育であるが、食を育てるのも食育である。我々が子どもの頃は、畑で芋を作ったりすることがあった。やはり自分たちで作る中で食に対する発想を持つことができる。特に岐阜県の場合は周りが畑だらけなので、地域のお年寄りに教えてもらって、子どもたちが一緒に野菜を作り、その作った野菜を給食に出す。その上では、保健所の問題点が出てくるので、給食で使えるように安全性も確保した上で、食べてもらう。給食も大事な教育の一環としてやってはどうかという趣旨である。
村上委員	おっしゃる通りだと思う。最近、地域の給食センターでは、HACCP(ハサップ)が導入されており、安全面でレベルが大変高いと思う。地域と交わる際、その面についてもカバーしながらやっていただくと、安全性という言葉も生きてくると思った。 また県内の良いところをいろいろと経験するということは、非常に重要である。岐阜大学にある地域協学センターには、県や市町村の自治体の皆さんにも委員として入っても

	らっている。地域での学びを大学レベルでは行っているけれども、小中高に広げていただくと良いのかなという感想を持った。
打江委員	私は飛騨高山の出身で、先ほど、飛騨高山のお話があり、知名度が高いということで嬉しく思った。 県外の他地域との定期的な交流をするということは、やはり自分が生まれたところやそこで生きてきた方のことをいかに知っているかということがとても大事である。教育委員会において、「ふるさと教育」をやられているが、その点についてお考えを教えていただきたい。
知事	私は旧美山町の山奥で育った。実は、地元においては自分の地元のことはわからない。やはり外の人から見て初めてわかることがある。こんなことを言うといつも怒られるが、私にとって川というのは透明に決まっている。美山だと、川の水はそのまま飲める。だから、長良川に来て「きれいでしょ」と言われても、この水は飲めないなと思ってしまう。我々にとっての当たり前は世界にとっての当たり前ではないということ。これは外の人に言われて初めてわかるのである。 息子が小学校から岐阜に来て、保育園の頃からの友達が東京から遊びに来た際、彼らが、「自然がきれい」「カブトムシがいる」「水がきれいで冷たい」「魚がいっぱいいる」と言って驚いていたので、「え、それ、普通じゃないの?」と思ったのを覚えている。特に、「橋の上から魚が見えますよ」と驚いていた。それは普通のことだと思うのだけれども、その価値というのは外の人に言われて初めて気がつくということ。 そしてもう一つは、例えば岐阜の子が三重に行った時に、「どんなところから来たの?」と質問されて、「岐阜です」と答えるだけでは済まない。 ヒントは、三重県の子が岐阜に来たときに教えてくれる。「川がきれいで水が冷たいね」と感想を聞くことで、今度は自分の言葉として、「僕のところは水がきれいで、冷たくて、カブトムシがいて、動物もいて、山もきれいだ」と説明できるようになる。その訓練をするた

	めにはやはり外の目がある。今度は逆に海に行くと、「海ってすごいね。いろんな生き物がいてね」ということも学んでくる。すべてが学びだと思っている。ただ、同じ地域の目だけで見ていたのでわからないため、そのきっかけとして交流が必要だと思う。
打江委員	もう一点、質問をさせていただきたい。資料1ページの5番目「フリースクールとの連携を進め、インクルーシブ教育を推進する」ということであるが、「インクルーシブ」という言葉が、具体的にどの範囲までを含んでいるのかについて教えていただきたい。
知事	例えば、学校教育の中でも、同じ学年の中で分ける方向に進んでいたりする。まずはこれらについてはできるだけ同じにしたいと考えている。さらに言うと、異学年を取り入れたい。世界では多文化がもう当たり前となっているため、インクルーシブ教育がもう少し進んでいる。岐阜県にも外国の方が住んでいらっしゃるが、日本語が全くできなくても子どもたちの中では全然違和感なくやっているということもインクルーシブだと思っている。言葉が通じない子に何かを伝えなきゃいけないということもまた大事な教育。 どちらかというと排除する方向に進むのがいじめである。だからインクルーシブというのはすべてを受け入れていくこと。教育現場における違い、すなわち学年の違い、身体的特性の違い、国籍の違い、言葉の違い、そういったものをまずは含めてインクルーシブであると思っている。
吉田委員	インクルーシブ教育についてよく理解ができ、素晴らしいと思う。今のところ考えておられる懸念点はあるか。
知事	私が県外も含めていろいろ見てきた中で、生徒はあっという間に順応するが、最初は先生が大変である。現場で指導をしなければいけない先生たちが評価をどうするか、成績が下がったらどうするかと懸念する。これらが今後想定されるハードルである。 いろんな学校を見てきて思うこととしては、子どもたちは学ぶ力があるため、教えてあげること自体がもういらなくなるのかもしれない。今の子どもたちは学びたいから学校に行っているのではなく、半強制的に送り込まれていて、どうやってこの時間をやり過ごすか

	たいな形になってしまっており、これはもう教育としては全く逆のことになってしまっている と現場の先生から聞く。もともと子どもたちが興味を持っていたもの、面白いものに対して 学ぶ力が出てくるため、そこを認めてあげられる先生と親の余裕がないことが一番の課 題になる。 先ほどのご指摘にもあったが、いきなりは難しいと思うが、答えがはっきりしている算数 は異学年教育で進めやすい教科であると思っている。その次は、国語、理科、社会とな る。 とにかく懸念点は最初のハードル。そこを突破していくため、「異学年集団による学び 合い」の財政支援において、事業期間を3年としている。1年間しかないと、たまたまその 学年が良かったからではないかと言われてしまう。3年ぐらいやった結果は、おそらく今ま で聞いた中では成績は上がる。また、子どもたちは学校に行くのが楽しくなる。その上で、 いじめが減る。いろんな人がいるということによる安心感を提供できると良い。
吉田委員	私は、教育に対する知見というよりは、家業があり、かつ、複数の事業を起業している 立場から、ビジネスのプレイヤーとしての観点で少し意見を述べたい。 ご発言のあった教育の考え方は、イメージとしては、海外の個別最適化とか、カスタマイ ズされた教育に通じるところがあると思い、とても興味を持った。 社会に出ると、一応研修制度はあるものの、基本的にはやはり人の背中を見て学ぶた め、知事がおっしゃるとおり、ソーシャルスキルが強く求められる。 このような点から、小学校低学年のうちに、こういった取組をすることは、教えられたこと だけを吸収するのではなく、人とのやりとりの中から助け合いや、チームビルディングの やり方を学ぶことができ、とても良い取組であると感じた。 今後、海外とのビジネスは特に拡大していくと思っている。その際、社会人としてもイン クルーシブ教育のような環境に置かれることが予想される。その中で、学力が低い子を引 き上げることができ、かつ、海外で実践されている教育のように、学力が高い子をもっと

	伸ばすチャンスが生まれてくるかもしれないというところに大変興味を持っている。このように、両面で幅が広がる効果があると思った次第である。 余談ではあるが、ニューズウィークという雑誌があり、海外でビジネスマンが読んでいるニューズウィークインターナショナルの編集の方と話をする機会があった。巻末に日本企業の特集があり、プロモーションも含め、かなり何ページにもわたって日本企業の紹介がされているので、なぜ日本なのか、と尋ねたところ、過去数年はいろんな国を調査していて、今回は日本ということであった。日本の状況が決して良いわけではないが、世界の目から見ても日本のものづくりを通じた企業の可能性をととても感じていることから、いろんな方に紹介したいとの想いを聞いた。 日本の 99.7%は中小企業であるため、インクルーシブな全世界の中で輝いていくためには、個性を出していく、何か光るものを身につけることが必要であり、今回提案された教育はそのきっかけになり得ると思っており、期待している。
知 事	とても大切なご指摘をいただいた。 実は、この方式は海外の飛び級制度とは違い、できる子をどんどん伸ばそうということではなくて、みんなで学び合うことによって人としての成長につながるというもの。 これは、新しいことではない。私や教育長の世代が小学生の頃は、学校が終わるとランドセルを放り出してお宮に行っていた。1年生から6年生まで全員がいて、今日は何して遊ぶかを決めていた。例えば、アケビを取りに行く時には、何が起こるかという、1年生の子を6年生のお姉さんが背負って山に行く。みんなで結構な数のアケビを収穫し、お宮の境内に並べると、4年生か5年生が先に取りろうとしているのを、6年生のお姉さんが止めて「1年生から好きなものを取りなさい」と言っていた。これはインクルーシブ教育である。 確かに昔の学校は読み書きそろばんを一律で学んでいたが、それ以外にこのような時

	間があった。今はこのような時間がなくなり、学校が終わると塾に向かう。子ども心にも、6年生のお姉さんは完全に大人だった。中学生になるとスクールバスに乗って中学校に通うため、町からいなくなってしまう、大人の世界に行く人だった。だからこそ、お宮で6年生から学んだことはすごく大事なことであった。 吉田委員がおっしゃった日本のものづくり。私も経済産業省の製造産業局でいろいろやっていたが、実は日本のものづくりは世界一である。中国の方が言っていたが、これから中国がどんなに発展しても日本のものづくりには勝てないと。なぜかと聞いたら日本には中国語には訳せない価値があると。それは、「思いやり」だと言っていた。 実は、「思いやり」は英語にも訳せない。因数分解するとシンパシーとかではない。「思いやり」とは、自分が誰かのためにエネルギーやコストをかけたとしても、それは自分がやったと言わなくても良いという概念なのである。例えば、トイレでスリッパを揃えて、2時間後に帰ってきた時に、揃っているといいなと思って揃える人はいない。後から来る誰かが気持ち良いといいなということを自然にできるということは、実はものすごい価値なのだ。 私が外国人の方と英語で話をした際、「心を込めて仕事をしてください」と伝えたが、通じなかった。 一生懸命やること自体が美德であり、誰かのために優しくすること自体を良しとする感覚は、とても大事である。それは一朝一夕に伝わるものではない。弱い人に対して優しくなり、それが自分の喜びとなることを自然に学ぶ。これはまさにインクルーシブの大事なところであり、教育の本質であり、ものづくりの本質でもあると思う。
総合企画 部 長	ただいま委員の皆様から貴重なご意見を多数いただいた。それでは、その他の出席者の方々からのご発言があれば、願います。
未来創成 局 長	では、私から。異学年教育について担当している。 参考資料として配布しているが、異学年教育に関して全国の先進事例を調べ、県内の

	小中学校に異学年交流を伴う教育活動にどれぐらい関心があるかという実態を調べた。 『「異学年交流を伴う教育活動」に係る調査結果』の最後のページをご覧ください。 今後、異学年交流を伴う教育活動をどうしたいかと聞いたところ、小学校では、今後、「拡充したい」という学校が約3割で、中学校でも 1/4 位が占め、関心を示している。 全国のこうした取組を行っている学校のうち、今のところ 20 校ぐらいを視察し、現地で生の声をお聞きしている。今後、事例紹介をしていきたいと思っている。また、知事の説明にもあったが、教育委員会とともに異学年集団による学び合いに取り組む小中学校を支援していきたいと思っている。
総合企画 部 長	委員の皆様からこの機会にぜひご発言をいただければ。
打江委員	ただ今説明いただいた円グラフについて、この意向調査の回答は、具体的に誰が行ったものか。
未来創成 局 長	資料は1ページになるが、今回の調査は、県内の小学校、中学校、義務教育学校の計 521 校を対象として実施したものであり、学校ごとの回答となっている。そのうち、学校からの回答率は約9割に達しており、大体の学校の現時点における意識を反映している。
打江委員	それは先生が回答したのか、あるいは生徒が回答したのか。
未来創成 局 長	学校に対する調査であるため、先生方の関心ということである。
打江委員	生徒の声はどうかというところを私は聞いてみたいと思った次第である。あと、高学年の生徒がどう思っているのかについても関心がある。いつも低学年を教えてばかりという現状にならないものか。
未来創成 局 長	了解した。来年以降、支援していく中で具体的に今のポイントを適切に把握していく。

総合企画 部 長	その他、ご意見があれば。
村上委員	先ほど言い忘れたが、コロナによる変化だけではなく、この十数年の間で、IT や SNS の発展によって、コミュニケーションのあり方も変わり、リスクも出てきている。最近のいじめや自殺は SNS を起因とするものもある。SNS を有効に活用しながら、どうコミュニケーションスキルをアップし、生徒間、生徒・教師間、教師間の人間関係を円滑にできるかということを追求め、推進していただけるとありがたい。
総合企画 部 長	それでは、教育長からいかがか。
教 育 長	おっしゃるとおりだと思う。今のご意見も踏まえながら、今回の会議の全体に関して発言したいと思う。 知事のプレゼン資料の「異学年集団による学び合いと遊びの効果」のところに書いてあることが今の教育全体の中で大事なことだと思っている。自分の優しさ、存在価値に気づくこと、認め合うこと、それがインクルーシブ教育の推進へとつながってくると思う。先ほどの知事のお話の中のお宮の遊びに代表されると思うが、私たちが幼い頃に当たり前のように学んでいたものが、今は、村上委員のお話にもあったように、SNS の発展等により簡単に情報が入るとともに、人と人がつながっているかのように錯覚してしまう。私たちが幼い頃はお宮さんのアケビの配分の話にあったような体験があったわけだが、当時から比べると子どもの数が半分に減ったこの日本の中で体験できるかといえば体験できない。でもそこには非常に大事な部分があると思う。それを私たち教育に携わる者は、意図的に子どもに体験させる必要があると思っている。その1つの方策が、私は江崎知事が訴えているこの異学年集団による学び合いだと思っている。 先日の岐阜大学との会議の中でもお話したところだが、キャリア教育という言葉が世の

中に出てきたのは平成になってからである。私たちが子どもの頃には町内には八百屋もあれば、電気屋もあれば駄菓子屋も目の前にあった。将来の職業を考えるとときに本物が目の前にあったが、それがなくなってしまった。全部スーパーや大規模な店舗にある。テレビは壊れると新しいものを買うだけだ。そんな世界で将来、子どもたちがどのような職業を選ぶのか。そのために私たち大人はキャリア教育という手段を使って、子どもたちにそういったものを見せているわけである。

不易と流行という言葉があるが、今回のこの提案は、私は不易の部分であり、根本を大事にした提案だと思っている。本日はせっかくほぼ全ての市町村教育委員会が視聴してくれているため、お願いしたいこととしては、こうした部分に共感して、根っこのところをしっかりとやっていきたい、ということ。義務教育は市町村教育委員会が行うものであるが、県もしくは県教育委員会としてお助けをしていくという提案であることを市町村教育委員会の方にはご理解願いたいと思う。

これは知事のみならず、吉田委員からのお話にもあったが、社会に出たらどの場面においてもみんな異年齢である。そういった点では、学校場で同じ年齢の人といつも一緒にいるというのは、ある意味、人生の中で非常に特別な場だと思う。そのため、やはり異学年による学び合いという環境を子どもたちに提供するというのは、子どもたちが社会に出たときにスムーズに、そして生き生きと暮らすためには必要なことだと思う。

最後に一つ付け加えると、やはり学校という場は、朝起きた時に行きたいなと思える場であってほしい。私たちは、子どもたちにそうした場をぜひ提供したい。市町村教育委員会の皆さんと共に想いをひとつにして、今後取り組んでいきたいと思っている。

本日は、教育委員の皆様方から忌憚のないご意見を伺い、いろいろなところで気付きがあり、また、知事と有意義な議論ができたのではないのかということを私の感想としても述べさせていただき、知事にお譲りする。

総合企画 部長	最後に、知事から。
知事	ほとんど教育長におっしゃっていただいた。 先ほどの村上委員のお話に関して触れさせていただくと、エピソードではあるが、私は息子に高校を卒業するまでスマホに一切触れせずに育ててきた。子どもの頃はとても欲しがっていたので、息子が中学生になった時に、スマホが要るか聞いたところ、要らないと言った。理由を聞いたところ、スマホを持つことで友達がどれぐらい無駄な時間を使っているかが分かり、お父さんがスマホを持たせない訳がわかったと言われた。 高校生になった時にも息子に聞いたところ、要らないと言われた。理由は、友達からアドレスを交換しようと言われて、「持っていないんだ」と答えると「カッコいい」と言われたと。 外国では子どもたちに SNS をやめさせようという動きがあるが、そうではなくて、その意味や問題点を子どもたちが自分で理解していくということも結構大事であると思っている。 そして、特に今の子どもたちに足りないと言われていることは、感性を磨くチャンスがないということ。やはり知識だけならもう AI には勝てないと思う。何を心地よいと感じ、何を嫌だと感じ、何をやってはいけないことかということを知識として知っているのではなく、やはり身体で覚える、自然の中で感じるということ。それを培うことこそが教育の本質かと思う。先ほどお話した「思いやり」という感覚を自然に学ぶことができる場所にしないといけない。 最後に一番言いたかったことを教育長におっしゃっていただいたが、学校は子どもにとって行きたい場所でないといけない。苦役の場所であってはいけない。いろいろあっても学校は行きたいという場所になった時に、教育の形ができてくるかなというふうに思った次第である。本日は、ありがとうございました。

総合企画 部長	これをもって総合教育会議を終了する。本日はお忙しい中、ありがとうございました。
--------------------	--